



香港微型小説創作の特徴についての一考察 : 香港微型小説選集 を中心として

著者	石 其琳
雑誌名	筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要
号	9
ページ	123-135
発行年	2014-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000280/

香港微型小説創作の特徴についての一考察

—《香港微型小説選集》を中心として—

石 其 琳

A Study on Characteristics of Hong Kong Creative Short-short Stories —Focusing on “Anthology of Hong Kong Short-short Stories”—

Kirin SEKI

前 言

これまで微型小説作品集を研究してきたが、今回は《香港微型小説選集》(注1)を取りあげる。この作品集に注目する理由は、香港が世界華文社会において、独自の位置づけを持ち、この土地に関わる作家たちの作品から醸し出された独自性を体感できると考えたからである。香港は1997年イギリスの植民地から中国に返還されたとは言え、返還の前後に流れ続くさまざまな歴史、政治、経済などの要素は、現地の住民層の構成と深く関わり、香港独特な思考と価値観を生みだしている。中国近現代史に欠かせない重要な土地であると同時に、ここでの文学の発展も、中国現代文学の特別な地域の文化として、見過ごせないのである。この点に関して、まず作品集の冒頭にある「序文二」に触れたい。

香港微型小説学会会長である東瑞氏が書いた「序文二」には、香港微型小説の現状についての説明をしている。これによると従来の中国現代文学において、香港の微型小説作品集の数が意外にも少ない理由を分析している。その第一の理由は、香港が中国の特別行政区という政治的背景によるものだと考えている。中国が改革開放政策を打ち出して以来、経済方面だけに留まらず、文化的方面も復活して、文学思想活動も盛んに躍動し始めたのである。現代文学において、近年には微型小説のジャンルが現代文学として認められ、文学的地位が定着された後、中国各地では微型小説(別名小小説)の創作が隆盛し、個人の作品集又は地域、創作テーマに関する選集など、作品集の出版も活況を見せている。しかし、中国国内で出版された香港作家に関する微型小説作品集は、数量的に僅少である。現存の多くの作品集を検視すれば、たとえ作品集に香港の作家の作品が収録された場合であっても、「香港地区」の作品として取りあげられる程度である。

東瑞氏によれば、中国国内において、質、量ともに充実した香港作家の微型小説の作品集がなかなか見られないのは、香港が中国の一「行政特区」であり、「国」ではない現実に起因すると考えている。近年中国国内では微型小説に関する作品選集が多く編集されているが、その編集の方法は、中国国内の作家たちの作品を中心に収録している。反面台湾、香港、マカオの作家の作品については、それぞれ数名の作家の作品を代表として収録するのが一般的である。そして海外の作家の作品選集を編集する場合、逆に香港を中国国内地域とみなし、香港作家の作品は除外されることが多いというのが実情である。

第二の原因は、香港地区の華文微型小説の創作事情をみれば、シンガポールなど東南アジア地域よりも弱勢だった点がみられる。実際今回取りあげる作品集が出るまで、20世紀80年代から香港の微型小説作品選集は3冊（注2）しか出版されていなかったのである。当時香港の現地発行の各新聞では、微型小説が創作発表できる版面が数多く設けられ、賑わいを見せているのにもかかわらず、作品集が少ないという奇怪な現象について、東瑞氏は、その時期の香港の文壇及び読者層について、微型小説を閲読する風潮が未熟であり、この文体に対して、認識が浅くて馴染みがなかったといっている。そして作家たちは読者を確保できない状況下であるから、当然作品集の出版数も少ないと分析する。実際「微型小説」が中国現代文学として認められ始めたのもこの時期である。

20世紀末から、華文文学としての微型小説の創作風潮が世界各地で巻き起こり、香港もその影響を受けながら、華文微型小説学会を成立させ、様々な形で華文微型小説の創作活動を推進してきたのである。前回私の微型小説に関する論文（注3）では、香港で開催された中高生の微型小説コンクールの優秀作品選集について考察した内容である。若い世代の創作環境づくりと意志を高める努力の実績をみれば、香港文学界の次世代を担う作家たちを育成しようとする苦心が知れる。この事実を踏まえて、今回《香港微型小説選集》を研究対象として取りあげる意味があると考ええる。以下、この作品集の作品を取りあげ、香港地域の特異性について考察する。

I 作品の編集趣旨と目的について

この作品集の編集趣旨と目的について検討するには、まず編集者の欽鴻氏が書いた「編集後記」をみよう。欽鴻氏は長期にわたって、「中国現代文学」及び「世界華文文学」の研究に従事し、《中国文学大辞典》、《中国現代文学辞典》などの編集委員を務め、世界華文微型小説の創作又は推進活動にも力を注いでいる。そして彼自身が華文文学の研究領域へ参加して以来、世界華文文学に関する著作も多く出版している。《世界華文女性作家微型小説選集》（注4）を編集した際、香港地区の微型小説の創作が盛んであり、優れた作品も数多く存在していることを察知し、世界華文微型小説の範疇において、重要視せねばならないと考えたのである。そこで、文学界の友人の協力を得て、《世華文学家》、《青果》、《作家》など香港刊行の文学雑誌で、作品の公募を始めてこの作品選集を編集している。

この作品集を編纂する目的について、欽鴻氏は香港の微型小説作品には、健康的であり、積極的な思想、豊富な生活画面、巧みな芸術性への追求により、既に世界華文微型小説の中国大陸、台湾及び東南アジアのシンガポール、マレーシア地域に比較しても、遜色ないレベルに達しており、さらに世界の華文微型小説界にも欠かせない地位を占めていると確信している。この作品集の完成によって、作家と作品を世界華文の文学界に紹介できることで、香港微型小説の発展空間の需要を満たせるであろう。特に中国大陸の読者に香港の微型小説の創作に対し、理解を深めさせ、文化と文学の交流を促進できると期待するのである。上述の目的を考慮して、欽鴻氏はこの作品集を編纂するにあたって、4つの選考基準を決めて編纂活動を行ったと説明している。以下は、この4つの選考基準の原則を見ることにする。

その1：作品の創作内容には、思想性と芸術性の結合を重視する。

欽鴻氏によれば、今回公募した作品には佳作が多く、内容については、1997年の返還後、そして中国の改革開放政策の実施以来、香港社会の庶民生活の多方面が描かれている。作品は幅広く、独

特の視角と構想をもち、表現手法が斬新で、芸術性の高さを収録対象に考える。この点に関して、特に編集者の欽鴻氏が強調していた思想性と芸術性に注目したい。歴史と政治制度の多大な変化は、創作にはかなりの影響を与えているはずである。

その2：作家年代の選択では、老、中、青の三世代の結合を考量する。

作品集は高名な作家から学生まで、全ての世代の作家を含んだのは、年齢世代が異なれば、当然人生経験も相違をみるからである、香港の歴史、社会生活の諸相をより全面的に、また香港の微型小説の個性的風貌を反映できると配慮したのである。特に若い無名作家の作品を収録した点について、作品自体が優れているほか、文学事業の発展にとって、若年層作家の育成には大変重要な意義を持つと考えたからだと彼は述べている。この点に関して言えば、微型小説の創作は、歴史が浅い分野であり、経験豊富な作家は、概ね多分野で活躍していることが多いが、今後の発展を定着させ、充実させていくためには、次世代の作家たちに対して、よりよい創作活動の環境づくりが最も重要であるという。

その3：作品の時代性に、歴史と現実の結合を重視する。

社会現実と歴史の関係は密接であるため、欽鴻氏は二つの意味を考量しながら作品の収録について選考している。一つは作品の創作年代、もう一つは作品が反映する生活の時代性を重視している。その2で述べたように、香港社会と香港微型小説の創作歴史の風貌を多少反映できるように、作家たちの早期の佳作を収録している。だが、本作品集はやはり現実に密着するのが原則であるため、現在の香港社会の現実問題を反映できる内容を重点的に考え、読者が香港の現代社会生活と近年の微型小説創作の理解を促進できるように考慮している。今回の作品集の内容を検視すれば、この編集趣旨が随所にあらわれていることは理解できる。それこそ香港の地域色が顕著に露呈されていて、この作品集の特徴であると言える。

その4：作家の出身地については、地元と外地居住者を配慮する。

作家たちの出身地について、香港の住民層には特別な事情が存在するため、作者たちも様々な生活形態を持っている。作家たちはすべて香港出身又は常に香港に居住しているという条件で選考するには、現実的ではないのである。この背景を考量して、基本的に欽鴻氏は長期に香港に定住している作家の作品を収録対象と考えているが、常に海外で生活し、近年香港に帰って来た作家の作品もある程度収録している。作家の生活経験の相違により、作品の内容に関しては、香港の社会生活を描写する内容の他に、他の国及び地域社会の生活をテーマに創作した内容の作品も少数を収録したのである。

以下は、作品に関して、幾つかの視点で作品と作家について取り上げながら、その特徴を具体的に考察する。

II 作者たちの出身地について

この章は収録された作者について考える。作品集は《香港の微型小説選》と名付けられているが、「編集後記」では作家たちが必ずしも香港生まれ育ちではないことを説明している。実際作者たちのプロフィールには共通の特徴があり、それは「香港」の歴史背景とも密接に関係している点である。小さな漁村から世界の金融都市へと発展した過程中、イギリスの植民地になり、中国に返還されるまで、住民の構成も波乱を経た歴史的時間と共に変化し続けてきたのである。香港の住民と言っ

でも、ほとんどが外地からの移民である。作者たちの出身経歴について、幾つかのパターンが見られる。この点について、まず作品集における作家たちの経歴を中心にみたい。

作者自身は、生まれ育ちが香港であっても、大多数の本籍は中国の広東省、福建省ほかであり、本人は移住者またはその2、3世代である。他に香港、マカオなどの地域で生まれた後、中国大陸、アメリカ、カナダで大学教育を受けた人、そしてシンガポール、マレーシア、インドネシアなど東南アジアの生まれであり、香港、中国内地又はアメリカなどの海外で教育を受けた後、香港へ移住した人も多くみられる。北京、上海など中国内地の出身でありながら、香港で教育を受けたり、または仕事を理由に香港移住の人もいる。逆に福建省、広東省出身であり、中学校時から東南アジアへ、その後また香港へ戻ったケースもみられる。中でも多くの人が同じ時期に香港に移住したという事実は、この地の歴史の変動時期に起因するのである。ここで特に作者たちの出身地に注目したのは、彼らから香港住民層の縮小図を透視できるのではないかと考えたからである。そして作者たちの複雑な出身地事情から、香港社会を描く時、何らかの影響が考えられる点である。要するに、彼らは様々な理由から、多難な香港に留まることになったのであり、それに起因した多元的な文化教養を身につけているのである。そして自分たちの人生経験を生かし、より複眼的な思考をもって、多様な香港社会の諸相を作品に取り入れ、作品集の特色を醸し出せたと考える。次は、作品のテーマを取りあげながらその特徴を考える。

Ⅲ 作品集の創作テーマについて

作品集の編集趣旨で触れたように、収録作品の内容は香港社会を中心に描くことが重要視されている。この章は、香港という土地が抱く「異域性」とそれに関わる庶民像について、その関連作品をテーマ別で取りあげて考察していく。

(一) 移民社会に関する作品

第Ⅱ章において、作者の出身地を検視することにより、既に香港の移民社会的特徴を明らかにしたのである。実際香港の住民には、移民層の存在は決して少なくはないのである。移民する形と事情はそれぞれが異なっても、香港住民がもつ移民に対する感覚は、特別な抵抗感はなく、ごく一般の人生観とみなしている。以下は、とりあげる問題に関わる作品を略訳する。

作品① 「黄昏」 (周蜜蜜 作)

絵描きの彼女は、毛の長いペット犬のカンカンと共に海辺で散歩を楽しんでいる。毎日最もリラックスできる時間であり、カンカンもいつも飛び回って喜んでいる。突然前方から犬の軍団がワンワン吠えて彼女たちに向かってきた。彼女は慌ててカンカンの前に立って防禦しようとしたが、逆に犬たちの威勢が高揚し、彼女は危惧感を覚え、なすすべを知らないまま立ち留まったのだ。

「シュウ——」犬群の後ろから誰かが叫んだ。犬たちはそれを聞いた途端吠えなくなり、おとなしく座りこんだのだ。彼女はこの犬たちの行動に対し、飼い主にいら立って「ちゃんと犬たちを見ないと危ないじゃないか？」と言葉が口先まで出たのだが、飼い主の姿を見たとたんに関口したのだ。その飼い主は、とても優しいまなざしを持った白髪のお爺さんだった。彼女は言葉に詰まったが、「驚かせて、大変申し訳ありませんでした」とお爺さんから先に謝りの言葉が出たのだ。「いいえ、大丈夫です」犬たちもしっぽを振りながら傍によって来た。「これは全部あなたの犬ですか？」

と彼女は微笑して尋ねた。「そうとも言えるが、そうじゃないとも言えるのです」謎めいた答えに対し、老人はすぐに説明を加えた。

「もともと私は一匹の犬しか飼っていなかったが、長男がカナダへ行くため、このハスキー犬を連れて来たのです。それに娘がオーストラリアへ行くため、このシェパードを連れて来たのです。そのうえ叔父叔母がアメリカへ行くため、ペキニーズを連れて来ました・・・」老人は緩い口調で説明をした。彼女は頷いた。そして次の日の黄昏、彼女は老人とその犬たちを写生したのだ。背景は黄昏の香港の風景だった。

香港は土地が狭くて人口が多い。中国では特別行政地域になっているが、政治経済など多方面において、不安定な要素が潜む現実から、他国への移民を考える人が多くいる。また植民地の歴史経験から、華僑世界との繋がりが厚く、香港から他国へ出入りしやすい条件も揃っているため、香港の住民には、このような価値観を持ち、互いに違和感が生じないのである。この作品のように、老人と犬たちは、香港社会の黄昏の光景を反映しているといえる。

作品② 「老いらくの恋」 (蘭心 作)

妻が亡くなってから、唐さんは孤独には慣れている。毎日退社後自炊して、さみしい夜を過ごしていた。しかし時には自分の余生は、このままでいいのかと不安も感じる。自分はもう50過ぎて、これから伴侶を探すのは、到底無理だろうと思った。だが、ある日曜日、唐さんは一階で新聞を買った帰りにエレベータを乗ろうとした時、後ろから「待ってください！」の声が聞こえてきた。一人の少女が大小数個の買い物紙袋をさげて走ってきたのだ。唐さんは彼女が入ってからドアを閉めた。少女は、彼に笑顔でお礼を言った。「いいえ。気にしないでください」と唐さん。しかし彼女はそれからじっと彼の顔を見つめていた。18階に着き、彼女は降りるときも振りかえって彼に笑顔で「サヨナラ」と挨拶した。それ以来、唐さんは彼女とあうたびに、必ず彼女から声を掛けてくれるのだった。時々唐さんが野菜を提げているのを見て、親切に自ら唐さんの家に行って料理を作ってくれると言う。唐さんは戸惑ったが、彼女の言うとおりにした。彼女は唐さんの家を片付けて、おいしい料理を作ってから自宅に帰った。唐さんの心は揺れはじめ、自分の青春時代を思い出し、こんな出会いはあるのだろうかと思いを凝らしながら嬉しさを感じた。

ある日、彼女はもじもじして「明日母を連れてきます。」と言った。唐さんは驚きとともに大喜びだった。翌日彼女は両鬢が白髪まじりの婦人を連れてきた。そして彼女は母親に「この方は大変真面目で信頼できます。あなた達が友だちになれば、私がカナダへ行っても安心できるのよ」と。また唐さんに「初めてあなたに会った時、すぐにあなたが好きになりました、父によく似ていたから」と言ったのだった。

唐さんの老いらくの恋は崩れたが、作者は少女が初めから彼を父親として見ていたことを暗示している。やはり少女には、香港に留まることなく、母親一人を残してカナダへ行くという背景と理由があったのである。作者は中国の江南地域に生まれ、北京に育ち、仕事で香港へ移住した人である。

作品③ 「輪廻」(阿濃 作)

「お父さん、ごめん、僕たちは香港にもどったよ。いまは香港空港から電話を掛けているの。」

「父さん、何で黙っているの？母さんと元気でね。僕たち落ち着いたらすぐに連絡するからね。」
鄧さんは見捨てられたような感覚で受話器を置いた。「誰から？ 何で黙ってるの？」と妻は鄧さんの落ち込んでいる様子を察知して聞いた。「阿祥と阿絹が香港に帰ったんだよ」怒りが彼の体を震わせた。当初移民することを堅持したのも彼ら、今香港へ戻りたいのも彼らだった。息子は彼に直接意思表示する勇気がなかったため、このように失業後こっそり帰って行ったのだ。

「彼らが帰ったから、わしらも帰ろう。」と鄧さんは声高に言った。「家はもう売ってしまったのに、帰ったらどこに住むの？」と妻はより冷静に言った。「家を借りればいいさ」「それで安いと思ってるの？ 私たちにはもう収入がないのよ。」「最悪『籠屋』(香港の貧困層の住居)に住めばいいさ」鄧さんはむかついて言った。「庭付きの家を住まずに、わざわざ籠屋に住むのはどうかしているよ！」と妻。鄧さんは無言になった。確かに今の住まいは環境にめぐまれ、庭にはいつも野菜と花を植えて、自身がもつ農家出身である夢をかなえてくれている。

数日後、子供たちがそばにいないため、自分たちは少しでも英語ができたほうが便利だろうと、妻から一緒に英語教室を通おうとの提案がでた。だが彼は年老いたからと断わったのだ。その後妻は教室で多くの友たちができて、皆同年代だし、授業後一緒にお茶飲んだり、買い物行ったりしたのだった。鄧さんは庭をいじる傍ら中文図書館に行って本を読んで過ごしている。ある日、彼は変わったストーリーを読んだ。子供が父親とある地を訪れた時、ふと自分の前世を思い出して、思った通り昔自分が大樹の下に埋めた玉石を取り出したのだ。このストーリーから、言葉をゼロから学ばなければならない外国へ来たのは、「仏教の輪廻」と同じ状態に置かれているのではないかと彼は考えたのだ。その夜、息子から阿絹が女の子を生んだとの電話を受けた。孫に中国語の名前を考えて、自分は英語の呼び方を考えるからと妻から言われた。そして同夜、彼は自分が赤ちゃんになって、満面笑みの両親は金髪の外国人だったという夢をみたのだった。吃驚して目が覚めたのだが、隣の妻が英語で寝言を言っているのが聞こえた。明日には自分も英語教室に通おうかと彼は考えた。

この作品もよりよい生活を求めるために香港を離れた移民のストーリーだが、移民しても成功せずに、若い世代が、逃げ場として香港に逆戻りの現実が描かれている。作者自身も中国江蘇省生まれであり、父親について10代に香港へ、定年後香港からカナダへ移住する移民の一人である。作品中、若い世代の夢に振り回され、海外へ取り残された年寄の世代が現実を直面し、必死に自分たちの余生を生きる姿が描写されている。そして仏教の輪廻観を考え、最も香港の人たちの精神を執着し、人間はどこに住んでもいいのではないかと悟った鄧さんたちの覚悟は、作者自身の経験と世界観を匂わすところもあるだろう。

(二) 歴史テーマに関する作品

作品④ 「駅」(林荫 作)

紅磡駅は人の往来が賑やかだった。

魯おじいさんは、大きな丸い柱の横に、両足で網袋を挟み立っている。網袋には、息子の好物の野菜の漬物、麦芽糖と西洋の嫁に初対面のプレゼント、微笑む子授け、多産、安産神の白磁製人形

である。迎えに来てくれる姪がまだ来てないようだ。彼はきょろきょろして周りを眺めていた。人込みのところに「帰郷老兵」の小旗を掲げている人がいた……。魯おじいさんは中国のブランド牡丹タバコに火をつけた。

「ちょっとタバコの火を貸してくれ」と誰かが近寄ってきた。魯おじいさんはタバコを相手に渡した。相手は白髪で魯おじいさんと同年代で、5が三つ並ぶアメリカブランドのタバコに火をつけて、牡丹タバコを返してくれた。彼の胸に「帰郷老兵」の布札が付けてあるのを見つけ、「あなたは台湾から大陸へ帰るのかい？」と尋ねた。「うん」と濁った目を魯おじいさんの足元の網袋を見て「あなたは？」と聞いた。「私は大陸からアメリカに行くー」魯おじいさんは満足そうに微笑んで「留学中の息子が西洋人の女性を娶ったのだ」。「ああー」相手は羨ましそうな眼差しで言った。

「私は昔兵士だったー」と魯おじいさん。「思いを起せば、私たちは三日三晩の不眠不休で南下して、広州市を解放したんだ。私は一番最初に広州に入城した解放軍戦士…」

「それは偶然だったな！」相手は一口ため息をつき「私は最後に広州から撤退した国民党の軍隊で、爆薬を運んで海珠橋を爆破する事件には私も参加している…」

「偶然だ！本当に偶然だ！」二人は熱烈に握手した。そして銜えたタバコを交換した。

駅には人々が行き来して、東へ、また西へ…

この作品は、20世紀80年代、中国本土と台湾の交流解禁の歴史的な大事件を背景に、それに関わった普通の庶民たちの人生をさりげなく描いている。面識もない老兵二人がタバコの火をきっかけに、短時間で交わした会話から、時代の重みを感じさせる内容である。作者は作品に幾つかのポイントを暗示している。二人がそれぞれ吸っているブランドタバコは、彼らが歩んだ人生の一側面を反映したであろう。

作品⑤ 「その日」 (林荫 作)

その日、広い周屋敷には六おばさんただ一人だった。

75歳の六おばさんの目と耳は老衰したが、それでも今日は周りの雰囲気はいつもと違うのを感じた。リビングの窓を開いて外を眺めたが、いつもの静寂な通りは今日もひと気がなく、たまに車が通って、枯葉が風に舞いあげられている。

お爺さまが生きている時、彼女は周屋敷の一番若いメイドさんだった。あの年、大砲の爆音のなか、周家全員は日本兵の被害を避けるため、徹夜で田舎へ避難した時も、今と同じ屋敷に残ったのは彼女一人だけだった。その時彼女はまだ若く、耳も目も機敏で、窓とドアの隙から日本兵の様子を観察しながら部屋の隅に隠れて、体を恐怖で震わせていた。お爺さまが亡くなった時、その遺言で、この屋敷は周家のルーツであり、絶対に取り壊したり、改築することは許さないと聞いたそう。だから周屋敷はずっと昔のままだった。その後、六おばさんは3代目の主人の面倒を見ることになった。またある年のことだが、主人一家は台湾へ出ることになった。当時香港街頭に爆音が頻発だった。当然この時も周屋敷に六おばさん一人で留守番をしたのだ。数日前、主人一家がまたどこかへ行くことになった。主人は離れるとき、彼女の耳もとで、大声に「しっかりこの屋敷の留守番をして、私たちは絶対に戻ってくるからね！」と言った。

裏庭の大樹のそばから海が見え、総督府もみえるのだ。強い日差しで、彼女の老衰した眼からは総督府に掲げた旗の色が変わったように見えるのだ。主人から彼女に「あの旗の色が変われば、政

府も変わるのだ。」「政府？政府って何かな？」彼女はあの紅い旗を眺めながら、「政府は、皇帝さまじゃないのかな？」と独り言ぶつぶつ言った。朦朧としたなかで、あの旗は燃えている焚火のように感じたのだ。ふと、今日は何日かなと考えた。リビングに戻って、壁にかけているカレンダーを見たら——1997年7月1日だった。

作品④と⑤は、ともに香港が中国近現代史の波乱に満ちた歴史背景に深く関わった内容である。作品④の舞台である紅磡駅は、1975年に開通され、1998年現在の名称に改名されている。中国国内各地へ繋がる直通列車の終点であり、一般列車のホームとは別にある直通ホームの入口には、出入国審査場が設けられている。ここは香港、または中国国内から様々なルートを通じて世界各地へ出かける拠点でもある。作品④最後の場面に、魯おじさんと相手が熱烈に握手し、タバコを交換した描写がある。戦後国共内戦を経て、中国の改革開放政策が打ちだされ、そして台湾政府が大陸との交流を許可し、元の兵士たちが帰郷できるようになったのである。作者は兵士たちを紅磡駅の舞台で、それぞれに中国の現代史の一角色を演じさせたのである。偶然に紅磡駅に合わされた元兵士の二人は、激動のこもった握手、相手の匂いが残っているタバコに、これまでの人生にある重大な勝敗の記憶と重層させるのである。彼らは歴史に愚弄された深い苦楽の経験を味わいながら、今この場で、それぞれが新たな人生へと出発するのである。「紅磡駅」が現地の人の流通するシンボリックの場所であると同時に、香港は近現代の中国における多くの人々にとって、人生の転換的場所だったのである。

作品⑤の時代的背景について、1997年の香港返還が重点的に描かれているのだが、しかし作者は六おばさんのその日の経験を描写しながら、彼女が香港という特別な土地で生きた人生を、中国現代史にある重要な事件と重ね合わせている。彼女が周家の一番若い使用人から、耳も目も衰えたお婆さんになった今までの人生は、香港という土地の激動的歴史を重層的に描いている。様々な時代を示唆する「香港」の立場、そしてそこの住民が歴史に翻弄された人生を、次々に彼女の感覚とともに露呈させているのである。

上述取りあげたいいくつかの作品から、香港社会の特殊な異域性が知り得られる。そして移民的社会の重要な特徴の一つは、人々がそこに留まることなく、常に流動的と考えるのである。この現実から、当然様々な社会問題が生じている。以下はこの点に関する作品を取りあげてみる。

(三) 老後問題に関する作品

老後問題は決して特別なテーマではないが、この作品集において、やはり香港という地域の現実を描いた内容が多くみられる。

作品⑥ 「97回目の抱擁」 (趙美薇 作)

車窓外の景色は都市から田舎へと快速に移り変わり、生活のシーンのように、ワンコマずつ進んでいる。艾琳は一束の鮮やかなバラの花とフルーツケーキの小箱をもって、静かな気持ちで、汽車の中から外の風景を眺めていた。沙田駅に着き、下車してから再び喧噪に埋もれてしまった。艾琳は駅で小型のバスに乗り換えて、遠くの垂公角という地へ向かった。20分あまりの道のりで、幽遠な山景色が続くなか、人生を歩んできたような感覚がした。終着駅は山坂に建てられた養老院、そこが彼女の目的地だった。2階に上がって、入り口ですぐにあの銀髪の恋人のカップルが目に入っ

た。海おじさんはいつも艾琳より早く来て、彼女の母親にミカンを食べさせながら「甘いのかい？」と聞いている。実は、母が食べているミカンは甘いかもしれないが、心のなかでは酸くて耐えられないであろう。彼女は母親が一番好きな赤いバラとフルーツケーキをテーブルに置いたのを見て、老婦人はすぐに老人に「誰なの？何でこんな沢山物を買ってきているの？」と尋ねた。この言葉を聞いた時に、もう艾琳には涙をのみ込むように、ようやくガマンができるようになったのだった。母はアルツハイマー症だったのだ。

ほとんどの記憶を失った母は、海おじさんだけはよく覚えている。海おじさんは母の昔の恋人だった。父が亡くなって3年後、生活のために海おじさんと結婚したいと言いつしたが、艾琳は許さなかった。翌年彼女は一人で英国へ行った。生活がどんなに苦しくても、戻って母がほかの人と一緒にいるのを見たくなかったのである。6年後に母はアルツハイマー症に患った。母は海おじさんとは結婚しなかったが、母を見捨てることもなく、一日おきに必ず遠くから敬老院に来ていた。先週香港が中国へ返還されたので、広東の増城へ母を伴って、そこで面倒を見たいと海おじさんから艾琳に話があった。艾琳はその話を聞いて、泣き崩れてすぐに同意した。いま艾琳は母親の背後から彼女を抱擁した。数年間の記憶では、これがちょうど97回目の抱擁だったとわかった。ふと母親は彼女をみて「やっと愛してくれる人をみつけたね！」と呟いた。それを聞いた艾琳は、涙が止まらなくなった…。

母と娘の深い愛情が、逆に母親の幸せを邪魔することになった。しかし重病の母親の人生の最後に、愛する人とともにいられることが最高の幸せに感じただろう。最もこの作品に注目したのは、海おじさんが彼女の母親を故郷に連れて帰り、そこで人生を終結したいという気持である。やはり香港は、彼らにとって心の故郷ではないことがうかがえる。

作品⑦ 「木人形」 (東瑞 作)

いとこの後について、一部屋ずつを見まわっていると、ここの静けさに驚いた。院長は小柄で太った50前後の女性だった。表情は冷淡だが、質問にはしっかり答えているので、個々の事情はよく知っているようだ。ある部屋に痩せこけた認知症のような老人がいて、「おばあさん、ご飯食べたのかい？」と尋ねたが、返事はなく、私たちを見てすぐに目線をそらしたのだ。「ここの大部分の老人はもう話す能力を失っています」と院長。「彼女たちは哑者なの？」「いいえ、一年中誰も会いに来ないからです。」「彼らの子供は？」「大部分が移民しています。…彼らも付いていきたいが、子供たちは荷物になるという嫌がるんです。あるいは一緒に連れて行きたいが、老人たちから拒否されて、仕方なくこの老人ホームに連れてきているのです…」

庭には数人のお婆さんがいた。腰は曲がり、頭はうなだれて、無表情だった。やっと偉君の母親が重病で、急診にかかっているのを知った。老人ホームを出て、すぐに偉君と電話で話をした。彼はいろいろ聞いてきたが、香港に戻ってから話そうと電話を切った。偉君は母親に会いに行くことを決めしたが、しかしそれは10日後のことだった。全てが遅かった。偉君は母の死後のことについて、一段落して私同伴である老人ホームへ行って院長に会いたいと言った。「母の生前には何か遺言はなかったでしょうか？」と尋ねた。「遺言？」「あなたは2、3年に一回も帰ってこなかったし、彼女にはあなたたちだけの家族しかいないのですよ。孤独のため、彼女は言葉を失ってしまったのです。臨終時には無力に自分の死後、木人形を作って、あなたの家においてほしいと話しました。」「な

ぜ？」と偉君は驚いて尋ねた。「あなたたち一家は老人がうるさいと嫌がって、彼女を見捨てたのです。しかし彼女はあなたたちのことが心配で、木の人形になって、部屋の隅に置かれて、静かにあなたたちの喜怒哀楽を共感したいのです。木人形は、言葉が出来ないから…」懺悔のため、偉君は異邦の自宅に、母の木人形を作って家に置いたのだった。

老人が死後に自分の木人形を作る発想は、異質なものと思われるのだが、親子関係、または老後問題を考えた場合、この作品のもつインパクトは強かったと考える。世界的な高齢化社会で、これからの老人介護について、多くの問題を抱えている。そして香港の特徴的な移民社会では、親子が離れ離れでの暮らしを送るパターンは、これからも更に色々な形態で進行し続くであろう。

作品⑧ 「お爺さん」 (張君黙 作)

古い隣人のはずだが、しゃべり始めたのは最近だった。朝公園でいつも同じところで体操をしているお婆さんがいる。ある日彼女の髪が薄く、顔色も悪くて元気に欠けている。彼女から「いま毎日病院で電療を受けている。電療を受けると脱毛になるんです。醜いでしょう？」私はいいえと言いながら、彼女は重い病気ではないかと疑った。「私は鼻咽瘤になったのです。半年ほど診察を受けてやっとで見つかり、薬と電療で大分よくなったのよ。」彼女はわざとガンという言葉を避けているが、確実にガンに患ったに違いないと私には分かっている。「最近よく朝鮮人参とツバメの巣を食べるのよ、この病気に効くと聞いたから」。それでガンが治るとは思わないが、「お金はいくらかかってもいい、最悪お金が無くなるだけで、少しでも命を延びるなら、お爺さんと共にできるから」と彼女は懸命に説明した。

「お爺さん」と言えば、私も見たことがある。彼は片足が麻痺し、最初は毎日お婆さんに助けられながら歩くりハビリをしていたが、最近では自分一人でも杖を使って、よぼよぼでも歩けるようになった。お爺さんは中風になってから鈍くなり、二人の息子は結婚して海外にいるし、年寄二人だけで香港に残って、貯えを頼りに生活をしているのである。お爺さんが先に行けば楽だが、洗濯、食事も一人でできないから、彼一人残されたら、生活が大変だろうと彼女は語った。彼女としゃべったひと月後、たまに公園で朝体操をしに行くが、お婆さんの姿が見えないのだ。ある晩の会社帰り、向こうからあのお爺さんがゆっくり歩いてきた。杖を握った腕に、数本の野菜を持っているではないか。彼は一人で懸命に余生を歩んでいるのだ。

この作品も子供たちと離ればなれの老人問題を提起している。香港のもつ歴史と政治的な背景から、住民たちは次世代に安定した生活環境を求めたのだが、その結果が裏腹に出た現実である。これは香港の人々が普遍にもつ大きな問題でもあると考える。

以上で取りあげた数編の老後をテーマにした作品は、一般的によく見られる老後問題であるが、やはり背景には香港社会の特別な住民事情が物語っている。共通して子供たちが海外にいる現象も、香港の地域に起因する現実である。

次は香港社会事情から見える庶民像をテーマにした作品を取りあげる。

(四) 香港の社会生活に関する作品

香港の地理と人文的条件により、特別な都市風景と庶民生活が見られる。以下はその一面を描写

した二作品である。

作品⑨ 「地獄から逃れた」 (東瑞 作)

急に阿奇はエレベーターの外へ押し出されてしまった。彼は一瞬唖然とし、捨てられた感じがしたのだ。この30階建てのビルは、サラリーマンたちがそれぞれに異なる階の会社に勤務するため、エレベーターは少なくとも八、九回は止まらないといけない。降下してまた上がるときと遅刻するだろう。それに29階のボタンが押されているから、誰かがその階で降りるのだ。これは大変だ！

この建物は新築ではないが、それほど古くはなく、築後約10年くらいだろう。エレベーターは小さくて遅い。どこの国の製品だろう？阿奇はエレベーターの外に立って、階数の点滅を目で追いながら、まだ5階しか上がってないんだと焦っている。阿奇は先のエレベーターの様子を思い出して、怒りが収まらない。彼はすでにエレベーターのなかに入って、もうドアが閉まるのを待つだけだった。急に男女二人が大声で「待って！」と飛び込んできた。彼らが入ったとたん、エレベーターはすぐに過重の悲鳴を發した。男女二人は彼と視線を交わしたが、全く出る意志はなく、彼が肥っているから譲るべきと睨んできた。納得いかないが、彼は一言罵言を言って、渋々外へ出たのだ。あの男女二人の体重合わせれば絶対に自分より重いのにと思った時、隣に立っていた大男がこの隙を見て、サッとエレベーターに押し入った。不思議なことに、今度警報はならなかった。絶対におかしいと思った、なぜなら大男は自分より重いのは確信できるからだ。この事実を見て、彼はあきらめずにまたエレベーターへ足を踏み入れたが、すぐにまた警報が鳴り出した。誰も出る気配がないので、仕方なく重々しく罵言を放して、彼はエレベーターから身を引いた。誰も彼を押ししたわけではないが、しかし数十本の無形な手が彼を押し出そうとしていると感じた。

阿奇は腕時計を見て、エレベーターが上昇している階数をカウントしている。上昇したり、止まったり、7階、9階、12階…18階…21階、23階、24階…階数のランプが突然消えた。彼は慌てて登りのボタンを必死に押し続けたが、反応はなかった。突然ボンボンと大きな爆発音が聞こえ、彼は何かあったのかわからなかった。すぐに管理人と警察が来て、エレベーターは落下して大事故が発生したことがやっと分かったのだ。そして乗客に生還者はいなかったという。彼は、先のシーンをもう一度思い出して、自分が地獄から逃げられたのだ。あの過重のベルは、自分に対する命の警鐘だったのだろうか？

この作品では、エレベーター事故を描いているが、その背景には香港の住宅事情が見え隠れしている。香港の人口は700万人以上、人口密度が日本の約20倍という狭い土地にいるため、住宅事情も極めて厳しい状況である。住居スペースを確保するため、高層マンションが森のように立ち並び、50階以上、80階建ても普通である。高層ビルには工場、オフィス、住宅など様々な業種と住民が混在しているものもある。オフィスビルと言えば、都市部では地上88階・地下6階建ての高さ415.8mを有する超高層の「国際金融センター」のような高層建物が目立っている。作品に描かれたのは、香港ならではの日常を題材に、その問題点を露呈させている。

作品⑩ 「旧雨(旧友)」 (蘭心 作)

志威はその電話番号を何度かけたか忘れるほどだ。いつも秘書の声か、または大任の留守電に吹き込んだ声「すみません、今電話に出ることができないので、あなたのメッセージを残してください

い、すぐに連絡をいたします」が聞こえる。

志威と大任は十数年来の同窓生だった。香港大学に入学して、大任が心理学科、志威は当時人気が高い経済学科だった。時計を見てもまだ午後3時、株売場には人が少なく、志威は昼食を食べ過ぎたせいで眠くなった。突然電話が鳴った。「先ほどごめん、何か用かい？」と大任。「今晚一杯飲まないかい？」「…今晚は患者が8時まで予約が入っているから、行くのは遅くなるけど…」「大丈夫、いつものところで待つよ」と急に元気になって、失落感がどこかへ飛んでいたようだった。志威は最近まわりの友だちが少なくなり、特に夜に付き合ってくれる人はほとんどいなかった。

仕事を終えた大任は息も荒く走って「五月花」バーに着いた時、客はあまりいなかった。去年にはいつも志威に付きまどって株の情報を聞きたがっていたウェーターも知らんふりで、彼の存在を無視している。そして志威はすぐに飲みすぎ、眼差しが恍惚としていて、何かを探しているようだった。ただ一年ぐらい会わなかったのだが、志威はこんなにも落ち込んでしまったのかと驚いた。昨年株市場が高峰期だった時、よく志威を誘ったが、彼は全く時間がなく、ただ電話でいつも忘れずに大任に株投資を勧めていた。最近大任のクリニックにも精神的悩みからくる患者が多かった。精神科医の勤ですぐに志威の病気の原因がわかった。彼は軽く志威の肩を叩いて「明日僕のクリニックに來なさい、長いことおしゃべりできなかつたからね！」と。志威の酔った眼差しから急に輝きが見えた。「そりやいいや！何かいい情報持っているだろう？ そうだ、今どこの株が買い時なんだ？」と。

香港の産業資源と言えば、観光業の他に、世界金融の中心的位置にあるため、庶民たちの生活もこれらのジャンルに、大きく関わっている現象が生じ、特に株投資を好むようである。一般の人でも、よく飲茶レストランで競馬や株の情報を新聞でチェックしている。作品に志威が経済専攻の大卒であるが、株市場の上下に振り回されて落ち込んでいる姿は、普通の香港人の姿でもある。作者は香港人の株投資に熱中する背後に、前述した政治経済、歴史文化など外部に起因する不安要素から、お金と不動産に執着する空しさを大任の角色を用いてより客観視させている。

おわりに

この作品集には、ここで取りあげた作品の他に、一般的恋愛、親子関係など現代社会における様々な世相を描くテーマも多くみられるが、今回は特に香港という異域の特徴から生じる問題を強く示す内容の作品を中心に取りあげたのである。香港の住民構成要素、そしてこの地の歴史、社会文化と深く関わった現実を含めて検討すれば、これら作品創作の特徴は、そのまま香港住民の意識問題の深層を反映していると考えられる。

中国の開放政策により、外国から経済など多方面において、本土に自由に出入りすることができることに従って、香港の地位も変化が見られたのである。外国金融資本も香港より分散され、外国からの観光客が減るなか、現在中国本土からは年間3千万人以上の観光者の来訪がある。香港住民は彼らに対し「越境者」と呼んでいる。そして「越境者」と呼ばれる本土から来た人々に対し、ある面ではありがたい存在だが、自分たちと同じ中国人である一方、差別化したい気持ちも持っている。

一国両制度と言われた香港は、自由の理念を強調しながら、共産党政権に対する不信は依然とし

て多くの人々の心に潜んでいる。香港の住民たちが願う自由とは、自分たちの住処を自由に選択できること、場合によっては、中国国籍を放棄することをも含めるであろう。

前述東瑞氏の序文二にも示したように、特別区域である香港は、長いこと歴史の激流に浮沈され、激動の歴史に取り残された孤児的存在であった。常に自生自滅の立場に置かされ、国ではない位置づけであるため、どこにも忠実心を要求されない反面、よりどころなく、如何に生き残れるかに執着しなければならないのである。イギリスの植民支配の時代では、たとえイギリスに行っても、しよせん香港から来たとしか見られない自分たちの存在は、支配者に対する執着心を芽生えにくく、常にこの場を通過する考えを持ち、ある意味での「通行人」的意識を強いられていたのである。

植民支配が約一世紀を経過して、中国に返還されて十数年の現在、国と言え「共産党」である理念に疑問を持っているし、これまで幾度も動乱を発生した「祖国」に対し、信頼しきれない面も抱いているのである。実際住民には中国本土から移り住んだ人たちの中、昔本土での辛い動乱の経験が移住する理由になったという背景もある。その人々は不安を抱え、心の底には返還された気持ちに定着していないのが現実である。この点に関して、作品の中で、彼らが簡単に生まれた土地を捨て、海外へ新天地を求めて生きる意識に対し、違和感なくできる理由が知れる。

一方で、これまで差別されながらも欧米文化重視の植民地教育を受けてきたが、結果的に祖国中国の文化に対する知識、教養の認識が薄い現実も存在する。この作品集にみられる作者たちは、やはりそこに苦心して問題提起をしながら、心のより所をこの香港の地に根づかせたいと考えているのである。実際香港の住民である彼らの多くは、本土出身であり、多数のルーツは中国である。しかし自分たちは「香港人である」という意識が強く、香港人として生き残りたい気持ちも持っている。

作家の東瑞氏が序文の最後に、香港の文学作品も中国現代文学に確実な地位を定着させなければならぬ。どっちにもつかずの立場から、華文という領域で香港の作品をより一層重要視される地位を占めるため、今後もっと多くの読者又は出版社が香港という特殊な地区に注目して欲しく、そしてこの作品集に抛磚引玉の効果を期待していると語っている。自分たちが中国人である事実は否定できない現実を踏まえて、どこかで祖国と一体になって、自分たちの人生に関わる香港の将来は、自分たちの問題であり、その住民たちが強く意識しなければならない課題であると考え。

注釈

注1：《香港微型小説選》 欽鴻編 江蘇文芸出版社 (2009年3月)

注2：当時見られる3冊は《香港小小説選》(桑妮編)、《香港作家小小説選》(東瑞、秀実編析)、《香港微型小説選》(東瑞、陳贇一編選)である。

注3：論文「世界華文微型小説の創作に関する一考察」——《世界中学生華文微型小説コンクール優秀作品選集》を中心として—— 筑紫女学園大学・短期大学部『人間文化研究所年報』第24号を参照されたい。

注4：論文「中国現代文学《世界華文女作家微型小説選集》への視角」筑紫女学園大学・短期大学部『人間文化研究所年報』第22号を参照されたい。

(セキ キリン：アジア文化学科 教授)